

戦国時代に活躍した女性

2020 年 11 月 17 日

我部山 民樹

1. はじめに

歴史上、活躍した女性が多いが、ここでは戦国時代に焦点を当ててみる。

戦国時代の女性は男性と対等な立場であった。跡継ぎの男の子がいなければ「おんな城主」や「おんな地頭」になることもあり、病弱な夫や幼い城主の補佐をして実質的に城主としての政務を執った女性。また戦場に出て勇敢に戦った女性もいた。戦国時代はまさに女性活躍の時代だった。

2. 戦国時代に活躍した主な女性の一覧表

赤松洞松院 (あかまつとうしょうに) ・不細工過ぎて出家させられたが還俗して嫁ぐ ・第 9 代赤松家当主・正則の正室 ・孫の代わりに政務	室町幕府管領・細川勝元の娘。容姿甚だ不器量で尼僧になった。1493 年、30 歳過ぎのときに還俗し、播磨の赤松政則の後添えとして嫁ぐ。夫の病死後、幼少の娘婿・道祖松丸（さえまつまる、庶流七条政資の子）が家督を継ぎ義村と名乗る。幼少の義村の後見人として、そして義村を継いで当主となった孫・才松丸（のちの晴政）の幼少時に政務を補佐し、事実上の当主として洞松院が所領安堵や諸役免除の認可はすべて行った。消息（洞松院印判状）には洞松院を表す「つぼね」の署名と黒印が押されていた。（鎌倉時代以降、書類に花押を模して代用として黒印を押印していたが、女性当主は花押を使用できなかったもので、黒印を押した印判状を発給していた。）
寿桂尼（じゅけいに） ・公家の中御門宣胤の娘 ・今川氏親の正室 ・今川氏四代に渡って政務を補佐	1508 年頃、今川氏親に嫁ぐ。中風になった夫・氏親の政務補佐に始まり、氏輝、義元、氏真の四代にわたって政務を補佐し、「尼御台」と呼ばれた。領主の立場で黒印を押印した印判状（黒印状）を発給していた。1568 年死没。 (別途、纏める) 注 1. 今川氏家系図
「女地頭」井伊次郎法師 ・井伊直盛の一人娘 ・養子「虎松」の代わりに実質的に政務を執る	直盛に男子がいなかったため、直盛の従兄弟の井伊直親が家督を継承した。直盛の一人娘は出家し、次郎法師と名を改めた。直親と次郎法師は許嫁であったと「井伊家伝記」にあり（それ以外には無い）、直親が今川氏から命を狙われることになり、井伊谷を出奔。直親が死んだものと思った次郎法師が悲観して出家したとの

	話が「伊井家伝記」にあるが定かではない。〈10 才前後だった〉 直盛の養子・直親が死去した後、還俗し、直親の子・虎松の養母となり、地頭（総領）の立場で、印判状に署名と黒印を押印していた。虎松を徳川家康に仕えさせた。 のちに「虎松」は「井伊直政」と改名し、徳川四天王の一人と言われるまでになった。1582 年死没。 一度だけ「次郎直虎」と名乗って徳政令の書状に花押を押印した人物は別人の男性であろう。（今川家家臣・関口氏経の子が「井伊次郎」と名乗っていたので、その人物と思われる。） （別途纏める）
立花闇千代（ぎんちよ） ・大友氏の有力家臣・戸次鑑連（べっきあきつら、立花道雪）の一人娘 ・唯一、おんな城主として明確な人物。	大友家の許しを受けて 7 歳の時に立花城の城督（土地の所有権は無いが、軍事権はある）等一切を譲り受け、立花城の城督になる。大友家の宿老・高橋紹運（たかはしじょううん）の長男宗茂が鑑連の養嗣子となり、立花城主となる。のちに宗茂は秀吉の直臣となり、柳河城主となる。関ヶ原の合戦で西軍に属した宗茂が敗戦し、柳川に逃れ落ちるように戻ってくるが、闇千代は戦支度で夫を救出に向かい、筑後川辺りで救出し無事に城に送る届けた後、攻撃してくる鍋島軍に対し、甲冑を着て城から出陣し撃退した。また、開城の説得に来た加藤清正の 2 万の軍勢の前に立ちはだかった。清正が「さすが立花山のおんな城主」と称え「自分の兵をみすみす損ねることもあるまい」と迂回路を通過して引き返したとの逸話がある。 これらの逸話の真偽のほどは分からないが、勇猛果敢であるとの評判があったからだろう。（別途、纏める） 1602 年死没。 注 2. 闇千代の画像と立花城
備前鶴崎城の妙林尼（みょうりんに） ・大友氏家臣・吉岡鑑興（あきおき）の妻	大友宗麟を島津家久が攻撃する。1578 年、大友氏の家臣の夫・吉岡鑑興は耳川の戦いに参加し、戦死。 家久が野村文鋼等に鶴崎城を攻略するように命ずる。城主は鑑興の子・統増（むねます）であったが、宗麟に従って臼杵城に籠城していた。鶴崎城の指揮は還俗

・島津軍に対し、城を死守。	した妙林尼に託されていた。城を明け渡すことを潔よしとしなかった妙林尼は籠城を決意し、農民の協力を得て城の防御をし、農民に鉄砲の使い方を教え、16 度にわたる島津勢の攻撃に耐えて、籠城を続け、ついに和睦に持ち込んだ。 妙林尼は「九州のおんな丈夫」と評され、今日までその武勇が伝えられている。 注 3. 妙林尼銅像
伊勢安濃津城の富田信高の妻 ・宇喜多忠家の娘 ・鎧兜を着て戦い、夫を救う	1600 年、関ヶ原の戦いの直前、安濃津城の攻防が繰り広げられる。東軍の信高は西軍の攻撃を受け、苦戦が続く中、信高の妻は、夫を助け、敵の有名な武士を討ち取るという活躍をする。 ついに本丸付近まで東軍に攻め込まれた安濃津城を守る中、城主の富田信高自身も、前線で槍を取って戦っていたが、敵の中で孤立して戻れない事態となり、自刃も覚悟した時、一人の鎧兜も鮮やかな若武者が現れ、瞬く間に敵を、五、六人倒してしまう。 信高が周囲の者に誰であるか尋ねると誰も知らない。それならば、自ら誰であるか確認しようとする、若武者の方から「生きてお目に書かれて嬉しゅうございます。」と声をかけてきた。 信高は若武者の顔を見て驚いた。なんとこの若武者は彼の妻だったのだ。 この日の彼女のめざましい武者働きは、見るものを驚かせたと言われている。『武功雑記』には、西軍・毛利秀元の家臣で「大剛の士」（人並外れて豪胆で武勇に優れた男）として呼び名も高い強者・中川清左衛門を討ち取ったとされている。
備前常山城の鶴姫 ・備中の大名、備中松山城主・三村家親の娘 ・備前常山城主・上野隆徳（たかのり）の妻 ・身一つで突撃	1574～1575 年の「備中兵乱（びっちゅうひょうらん）」の戦いで、三村家が劣勢に追い込まれ、毛利・宇喜多勢に城が完全に包囲されると見るや、たった一人で敵陣へ乗り込んでいった。その姿を見ていた常山城の従女 34 人も団結し、長刀を手に敵陣の中に飛び込み全員討ち取られてしまい、鶴姫は自決した。 やがて「常山女軍（つねやまじょぐん）の戦い」と言われ、後世に語り継がれることになった。

	注 4. 「女軍」の墓
おつやの方 ・尾張の武将・織田信定の娘 ・東美濃の岩村城主・遠山景任の妻 ・甲斐武田の譜代家老衆・秋山虎繁の妻 ・織田信長の叔母 ・織田信長に処刑される	遠山氏は武田氏と織田氏に両属していた。子がないまま夫・遠山景任が病死。そこへ織田信長がまだ幼い自身の五男の御坊丸を養子として送り込み、武田方であった岩村城の乗っ取りを図る。「おつやの方」が事実上の城主として君臨することになった。 わずか2カ月後の1572年、武田方の秋山虎繁が城を包囲し、「おつやの方」との結婚を条件に、無血開城を要求。家督も御坊丸も護るという条件だったため、結婚に応じる。しかし、御坊丸は人質として甲斐の武田に送られてしまう。 1575年、自身の子を武田方に人質に取られた信長は激怒し兵を送る。激戦の末、織田軍勢に城を包囲され、城を明け渡す。しかし、信長は命を救うとの約束を守らずに虎繁と「おつやの方」を逆さ磔で処刑したと伝わっている。諸説あるようだが。注 5. 岩村城跡
「小松姫（稲姫）」 ・徳川四天王の本多忠勝の娘 ・真田信之の妻 ・沼田城の留守を預かっていた時、孫に会いに来た敵方の義父と義弟の入城を拒否	1600年の関ヶ原の戦いで「小松姫」の夫・信之は東軍に属していたが、西軍に属している義父・昌之と義弟・信繁（幸村）が、下野の犬伏から信濃の居城・上田城に引き返す途中、小松姫が留守を預かる沼田城に孫を見たくて立ち寄った。しかし「小松姫」は「例え舅であつても敵味方の間柄であり、敵を城に通すことは出来ない」と甲冑を身にまとい、武装した兵を従えて入城を拒否。昌之は「さすが本多忠勝の気性を受け継ぐ娘よ」と舌を巻いたと言われている。しかし、後日談があつて、侍女に正覚寺に案内させ、翌日密に孫を連れて行き、最後の対面をさせたと言う。 注 6. 小松姫画像
「お田鶴（おたず）の方（椿姫）」 ・今川義元の妹 ・今川氏家臣で曳馬（ひくま）城主・飯尾連龍（つらたつ）の妻 ・夫の死後、家康勢	1564年、夫・連龍が徳川方に内通した疑いをかけられ、今川氏真に謀殺された。それに怒った「お田鶴の方」は城を守る決心をし、武田方に内通した。 1568年、家康が使者を派遣し降伏を勧めたが、応じなかった。酒井忠次等徳川方に対し城兵300余で防戦したが、城兵200人余りが討ち死にした。徳川方も300人討ち死にした。翌日、徳川方が城の外郭に乗り込むが、「お田鶴の方」が、緋緘（ひおどし）の鎧と甲を着

に攻められたが、降伏に応じず、鎧甲を着て徳川勢に切り込み、討ち死にした。	て長刀を振って切って入り、侍女 7, 8 名または 18 人も同じ格好で左右に並び、門を開けて突戦して共に戦ったが、全員討ち死にした。この最後に「お田鶴の方」の志操の節烈ぶりは男にも勝っていると感じないものはいなかった。 注 7. 曳馬城跡
足利氏姫 ・第五代古河公方(こがくぼう)・足利義氏の娘 ・母は北条氏康の娘(浄光院) ・10 才前後で古河城主となる。	1583 年、跡取りがない状況で、父・義氏が死去。後継者問題が発生した。 この頃の古河公方は小田原の北条氏直に臣従していたこともあり、北条氏康の娘(浄光院)が産んだ足利氏姫を古河城主として擁立。氏姫はまだ 10 才前後と思われる、政務は御連判衆と呼ばれる家臣が行っていたようだ。小田原・北条氏が滅んだあと、氏姫は秀吉により、古河城から退去させられ、古河御所に住む。1591 年、秀吉の命で長年敵対していた小弓公方・足利国朝(足利義明の孫)と結婚。これで関東の足利両家は統一されたが、両家の家臣の折り合いが悪く、国朝は秀吉が与えてくれた喜連川の領地に住み、氏姫は古河御所に住み続けて、奇妙な夫婦関係となった。国朝が病死すると、弟・喜連川頼氏と再婚し、喜連川善親を産む。 1620 年、46 歳で死去。 注 8. 古河公方館跡 注 9. 後北条氏家系図 注 10. 関東公方家系図
お江(崇源院) ・浅井長政の三女 ・母は信長の妹・お市の方 ・2 代将軍・徳川秀忠の妻 ・三度の結婚、 ・御台所で唯一将軍の生母になった	略(あまりにも有名で、逸話も多くてとても紙面が足りなくて書き切れないので割愛。)
前田利家とまつ(芳春院) ・前田利家の正室	略(あまりにも有名で、逸話も多くてとても紙面が足りなくて書き切れないので割愛。)

・篠原一計の娘 ・母親は利家の母親の姉。 ・学問や武芸に通じた女性	
山内一豊の妻・千代（見性院） ・山内一豊の妻 ・良妻賢母の見本とされる	略（あまりにも有名で、逸話も多くてとても紙面が足りなくて書き切れないので割愛。）

○石田三成の家臣・山田去暦（きょれき）の娘の「おあむ」

「おあむ物語」は青春時代を戦国時代の混乱の中で過ごした山田去暦の娘の「おあむ」の思い出話である。（庵に住む尼僧の意味で、この女性の愛称がおあむ、おあん）

父親・去暦が関ヶ原の戦いで大垣城に籠り、徳川家康の軍勢から石火矢（いしびや、火砲の一種）を打ち込まれる中で（以下、引用）

「おあむ」は母や女性たちと鉄砲玉を作り、味方が討ち取った敵将の首に札を付けて天守に並べて置き、毎夜これにお歯黒を付ける作業をし（お歯黒を付けた武士は身分が高いとされたので、のちの恩賞のためにお歯黒首を作った。）目の前で弟が射殺され、冷たくなっていくのを目の当たりにします。また、闇に紛れて城から逃げる際には、身重の母親が急に産気づき、田んぼの水を産湯代わりに妹を出産。すぐに父親が母親を肩にかけて落ち延びていきます。

凄まじい戦国時代の実像、この時代を逞しく生きた女性の姿を感じ取れる。

注1．今川氏家系図

源氏（義家）→足利家→吉良家→今川家初代当主・国氏→

第8代当主・義忠→第9代当主・氏親→第10代当主・氏輝（寿桂尼の嫡男）

↓

○次男・今川彦五郎（寿桂尼の子）

○三男玄広恵探（側室の子）

○**お田鶴の方**

○第11代当主・義元（五男、寿桂尼の子）

↓

○第12代当主・氏真（義元嫡男）

○嶺松院（義元の娘、武田義信の正室）

注 2. 閻千代の肖像画と立花城



注 3. 妙林尼銅像

A bronze statue of Myōrin-ni, a Buddhist figure, standing and holding a staff. The statue is greenish-brown and is placed next to a black pillar with a yellow label that reads "浄財" (Jōgai).

注 4. 女軍の墓

A photograph of a grave site in a wooded area. The grave is marked by a large, flat stone slab. The surrounding area is filled with many smaller, green stone markers and is surrounded by trees and foliage.

注 5. 岩村城跡

A wooden signpost with the characters "岩村城址" (Iwakura Castle Site) written in white. The sign is set against a background of trees and foliage.

注 6. 小松姫肖像画

A portrait painting of Oomatsu-hime, a woman in traditional Japanese court attire, including a red and white kimono with a green obi. She is seated and looking slightly to the left.

A stone marker with the characters '史馬城' (Shima-jō) carved vertically into it, standing in a grassy area.

盛定
(北条早庭)

宗瑞
弥二郎

氏綱
氏時
氏広
宗哲

氏康
玉綱城主
為昌
小机城主
氏亮
足利朝氏家
女子
吉良頼康家
綱成

氏政
(大目八王子城主)
氏照
(藤田鉢形城主)
氏邦
三輪城主
氏規
(虎形唐沢山城主)
氏忠
小机城主
氏光
(上杉)
景虎
今川氏政家
女子
足利源氏家
女子
武田勝頼家
綱成
玉綱城主
氏繁
玉綱城主
氏秀
江戸城代
氏勝
玉綱城主

氏直
(大目岩付城主)
源五郎
岩付城主
氏房
字忠佐
直重

小机城主
三郎
小机城主
氏信
吉良氏朝家
女子

○鎌倉公方家系図

足利氏(鎌倉公方・古河公方)

1基氏 — 2氏満

3満兼 — 4持氏

【磯川御所】

満直

満隆 — 持仲

【稲村御所】

満貞

義久

安王丸

春王丸

【古河公方】

①成氏 — → 古河公方

義久
 安王丸
 春王丸
 【古河公方】
 ①成氏
 ②政氏
 ③高基
 ④晴氏
 藤氏
 ⑤義氏
 輝氏
 藤政
 晴直
 義勝
 國朝
 氏姫
 賴氏
 【宮原氏】
 義照
 義明
 基賴
 賴純
 國朝
 賴氏
 嶋子
 顯実
 (上杉顯定養子)

以上